

【べつくち】

何の前ぶれも、何の原因もなく、身体のどこかに、何か厭（いや）なものが発生することがあります。

痛いとか痒いとかはなくとも、厭な感じがします。

疣（いぼ）とか面皰（にきび）とか、名前が付いているものは、安心するのですが、名前の付けようのないものは不安です。

それは、突然の春の嵐の日に、右の掌にできた、小さな黒いものでした。

ほくろが掌にできるなんて珍しいので、これはほくろではなく、はじめは鼻くそがこびりついたのかとおもって、左手の爪で弄っていましたが、だんだんと大きくなってしまいました。

そうして、黒いものではなく、いつのまにか、黒い穴になっていました。

そのうち、その黒い穴は、赤ちゃんの口くらいの、大きさになっていて、中をのぞくと、暗くてどうなっているのかわからない。

朝の光に照らしても、よくわからない。

ともだちに見られるのが厭で、ぼくは右手をいつも握っていました。

すると、汗なのか、（赤ちゃんの口から出る）涎（よだれ）なのか、掌がすぐにぬめぬめとしてしまっていて、感触が悪い。

それでもともだちの前では、意地でも、右手を開くわけにはいきません。

何日経ったのか、おそらく一ヶ月まではいっていないでしょう、掌にできた赤ちゃんの口に、歯が生えてきました。

ちいさなかわいらしい歯が、四本。

すると、穴の周りが唇に見え出して、穴をのぞくと、舌らしきものもあります。

口というものが、こんなに気味の悪いものだとは知らなかったけれども、せっかくできたものなので、小さな愛着らしいものが、芽生えていました。

ぼくは、この新しい口に、牛乳か何か飲ませなければいけないのではないかとおもい、村の小さな牧場に行きました。

乳牛はいなかったけれども、おっばいの大きな山羊がいたので、山羊に近寄って、乳首のところへ右の掌を持って行きました。

けれども、新しい口は、乳を欲しがらない。

そうか、口があるんだから、何か喋るかもしれないとおもって、

「のみたいものはなにかのう」

と聞いてみました。

けれども、答えません。

口はあっても、耳がないのだから仕方ない。

とにかくぼくとしては、何か飲ませないといけないとおもって、いろいろ試してみたのですが、駄目でした。

何か予感がして、血なら飲むかも知れないと、手首を切ってみました。血も飲まない。

何も飲まないで死んでしまうかも知れないと、ぼくは泣きながら右往左往したのですが、早くも時間切れでした。

新しい口は、死んでしまいました。

萎びて、だんだん小さくなって、そのうちに消えてしまいました。